

第2回文化施策に関する市民懇話会 議事録

○日 時 令和6年8月27日（火）18:30～20:00

○会 場 高岡市役所 803 会議室

○出席者 【委員】 荒井委員、有田委員、筏井委員、伊豆委員、中川委員、藤田委員、
山本委員（五十音順）

1 開会

2 協議

- (1) 第1回文化施策に関する市民懇話会での意見の振り返り（事務局から説明）
- (2) 「芸術・文化活動の意義」、「30年後の市民の芸術・文化活動」について意見交換

委員

私が芸術・文化活動を始めたきっかけは、母が活動をしていたから。子育てが一段落した母が活動を始めたことがそもそもの契機となっている。昭和40年ごろは日本の文化を大事にして、繋げていこうという時代の流れがあり、当時は伝統芸能を習う人口が非常に多かった。現代では、伝統芸能をやっている子どもは少なくなってしまったが、家や学校以外に居場所がある子どもたちは情緒豊かに育っていると感じる。実際に、保育園や学校で教室を開いた際に、先生から伝統芸能を習っている子や祖父母と一緒に暮らしている子は、そうでない子と比べると情緒が安定しているという声も聞く。芸術・文化活動は異年齢との交流のツールにもなり、子どもの心の豊かさにつながっている。

かつては地域の祭り等の関わりで文化は繋がっていたが、今はないように感じる。人と人との繋がりの中から心の豊かさが生まれる。文化がその懸け橋になってくれればいいと思っている。

委員

芸術・文化活動は個人の知識・教養の向上の意味もあるし、健康の保持においても良い影響がある。実際、詩吟は腹式呼吸をするので元気な人が多い。多様な立場の人たちと交流するので、人と人との繋がりという点でも効果がある。地域にとっては、伝統文化がそれぞれの地域にあるということで繋がりが増える。コロナで活動が減ったが、伝統文化は根強い。学びの場を提供する、世代間の交流が図れるといった点で地域コミュニティの維持につながる。

どんな形でもよいが、30年後も伝統行事・伝統芸能が伝承されていてほしい。自ら演じる、鑑賞する、活動のお世話をする。どんな形でも一人一活動をしてもらえれば、継承さ

れる。仕事の間、地域での活動の間、趣味の活動の間などの各場面で活動があれば、自分自身を高めて生きがいを持つことができ、結果的に健康や地域のためになる。

委員

昔は学校単位のクラブや授業の一環でお花やお茶を習っていた。当時は型で子どもたちに教えていたが、現在は子どもたちの多様な個性を尊重しながら教えているので、非常に難しいと感じる。型から入ると非常に教えやすいが、現在、子ども教室などで教える際には、子どもの主張を尊重しつつ、型を説明することで、本人が納得することを大切にしている。

昔では考えられなかったが、現代ではインターネット上で作品を評価する展示もあるので、30年後に文化・芸術がどのようなになっているか全く想像できない。もっと個性的になってくのかも。ただ、作品を愛でるという気持ちは世代で違いはないので、小さな子どもから祖父母まで、家族でも一人でも地域でも同じ土俵で楽しむことができる。そうして親しむことが文化の継承に繋がっていくと思う。

委員

芸術文化活動は精神的・経済的に余裕がないとできない。かつては旦那衆と呼ばれる社会的地位のある人たちが芸術・文化活動を支えていた。芸術や文化は精神的に余裕を生むが、なくてはならないとだめかという、そうではない。昔は経済的に余裕のある人が茶室や中庭を自宅に持っていたが、最近はそのような人もいない。また、学校でできることも限られている。

御車山に関しても同じことがいえる。今でこそ伝統文化となっているが、当時は最先端のもので、経済的に余裕のある人たちがお金を出して山車を披露していた。しかし、現在は町に御車山を支える財力がなく、行政からの予算をもらって運営しているという実情がある。御車山は30年後には無くなってしまうのではないかと危惧している。町中から人が抜けている。人がいない町に歴史も文化も育たない。

委員

文化の意味について調べてみたときに、「人の営みに関する様式すべて」と出てきた。文化とは過去のものだと捉えがちだが、これから作っていく様式も文化である。ただ、新しく作ったものを自分一人だけが認めているのでは様式にはならない。周りの人たちも巻き込んでコミュニケーションをとることが必要だ。

一語一語を紡いでいく言葉（自然言語）だけでは文化は形成されていかない。文化を作るためには全体を大きく見る必要があり、そのためには造形言語を鍛えなければいけない。芸術というのは自然言語ではなく、造形言語を鍛えるために芸術がある。

芸術は、好きなことをすれば良いというわけではなく、ふるまいがどう位置づけられるか、社会の文脈の中でどう捉えられているのかという全体の日を持つことが必要。それが教養であり、芸術文化は教養と一緒になくてはならない。高岡の教養を若い世代に学んでほし

い。また、継続することは重要である。最初は知られていないものも、継続していくことで認知が広がっていく。

委員

芸術を習うということに関して、長期間習い続けることに抵抗を感じる人も多くいるので、単発で習えるような取組みがあると、芸術に触れあう良いきっかけとなる。学校とアーティストをつなげる事業は非常に面白い。(ものづくり・デザイン科、アウトリーチ事業)

ただ、一回体験して終わりではもったいないので、その後いかにして次につなげるかということも重要になってくる。公演のリハーサルや生け花の生ける場面を公開するのはおもしろい取組みだと思う。

今後は最先端の技術を使った公演をしていきたいと思っている。守るべきものは守り、新しく挑戦していくことが大事。

委員

見せることも大切である。一方で、感じることも重要と考える。感動が残らないと、文化として残らない。

委員

今後 30 年間を考えるにあたって、これまでの 10 年間を振り返ると、変わったところと変わっていないところがある。構造的な問題で変わらない部分はどうしてもある。ただ、小さな部分で変化している部分は確かにあって、変わるということを継続していくことが大事だと考えている。

委員

今あるものを守るだけでなく、新しく作ることも大事。人は減っているが、だからこそ生まれるものもある。AI だったり新しい技術もある。

委員

様々な事業を実施しているが、将来的には市民が自らやりたいことを立ち上げて能動的に発信していくようなまちづくりが必要かなと思う。能力やシステムがあれば可能。音響などのセミナーを開催しており、そういったところで技術を学ぶことで自分たちの手でイベントを開催して、行政が支援するというのができればよい。

高岡市では、今年度「ステージ公演チャレンジ支援事業」というのをやっているが、市民が自ら企画して能動的に取り組めるまちづくりが個人的に目指す形ではある。まちなかに芸術文化があふれることで心の豊かさや生きがいに繋がってくるのではないかなと思う。

委員

30 年という期間を考えたときに、行政の財政状況は悪くなると想定される中で優先順位をつけて、これまで選択をしてこなかった人たちに選択させることが必要になる。行政は全部できない。市民の方が自発的に何かやる環境を作っていく。どうやってやるか、座組どう作るかが大切。

委員

何かをしようとするときに、昔からあるものに新しいものを取り入れるなど、周りが応援したい気持ちになるものでなくてはならない。